

スロバキアの人口アトラス

Population Atlas of Slovakia

大 関 泰 宏*

Yasuhiro OHZEKI

要旨

スロバキア人口アトラスは、スロバキアにおける2001年センサスの結果を中心に新旧の各種統計データを援用して編纂された168頁、444枚の地図と168個のグラフ、および一部の表からなる地図帳で、2006年10月からCD版、紙地図、モノグラフの順に出版されたものである。構成上の大きな特徴は、人口学と人口地理学、双方の視点がバランスよく組み合わされている点にある。人口学が重視する事象、たとえば出生では、出生数、粗出生率、標準化出生率、総出生率、合計特殊出生率、標準化総出生率、総再生産率、純再生産率について多数の主題図とグラフが作成されている。他方、地理学が重視する視点、たとえば人口の分布や移動、社会・経済・文化的属性に関する指標も数多く採用されている。また、主題図は都市内から国家間のレベルまで空間スケールや地域単位を換えて描かれている。

キーワード：スロバキア、人口アトラス、地理学、人口学、コメニウス大学

I はじめに

東欧革命から4年後の1993年、いわゆる「ビロード離婚」によってチェコと分離独立したスロバキア共和国は、資本主義経済への移行に伴うさまざまな改革と平行して、独立国家に必要な諸制度の整備を急速に進めてきた。各種制度設計の基礎となる統計調査に関しても、スロバキア人の手による最初の人口センサスが2001年に実施された。これに関する基礎的なデータと主題図は、スロバキア統計局のホームページで手に入れることができる(Statistical Office of the Slovak Republic)。

スロバキア人口アトラス(Population Atlas of Slovakia)は、その2001年センサスの結果を中心に新旧の各種統計データを援用して編纂された168頁、444枚の地図と168個のグラフ、および一部の表からなる地図帳で、2006年10月からCD版、紙地図、モノグラフの順に出版されたものである。スロバキア教育省は2002年から研究・開発の国家プロジェクト11分野を進めており、アトラスの作成はその一翼を担うものとして国の財政的・制度的な支援を受けている。編纂の

中核を担ったのはコメニウス大学理学部人文・人口地理学科のスタッフで、人口アトラスには統計を単に地図化するという以上のスロバキア地理学の研究成果が随所にふんだんに盛り込まれている。現在、当該学科の研究スタッフは、人文地理学分野10名と人口地理学分野7名によって構成されている(Department of Human Geography and Demogeography, Faculty of Natural Sciences, Comenius University in Bratislava)。

アトラスの内容構成は、冒頭に「スロバキアとヨーロッパ」と題する導入の序章があり、続いて以下の7章が配置されている。

1. 人口の増減と分布(人口増減, 人口分布, 人口密度, 人口ポテンシャル)
2. 人口の自然増減(婚姻, 離婚, 出生, 中絶, 死亡, 自然増加)
3. 人口の空間的移動(居住移動, 通勤・通学移動)
4. 人口構造(性と年齢, 経済・社会的構造, 民族, 宗教, 教育)
5. 居住(住宅, 住居, 世帯)

* 岐阜大学教育学部

6. 総合としての人口（人口増加，平均余命，健康，生活の質）

7. 人口予測（人口増減，出生率，死亡率，年齢，高齢化，従属人口，国際比較）

構成上の大きな特徴は，人口学と人口地理学，双方の視点がバランスよく組み合わされている点にある。人口学が重視する事象，たとえば出生では，出生数，粗出生率，標準化出生率，総出生率，合計特殊出生率，標準化総出生率，総再生産率，純再生産率について多数の主題図とグラフが作成されている。他方，地理学が重視する視点，たとえば人口の分布や移動，社会・経済・文化的属性に関する指標も数多く採用されている。また，主題図は都市内から国家間のレベルまで空間スケールや地域単位を換えて描かれている。

本稿では部分的にしか触れられないが，以下にアトラスから読み取ることのできるスロバキアの地域概要と地域変容の事例を若干紹介する。

II スロバキアの地域概要

スロバキアはヨーロッパの中央に位置し，北をポーランド，西をチェコとオーストリア，南をハンガリー，東をウクライナと接する。南北約200km東西約400km，その国土面積は日本の8分の1ほどになる。南西部のドナウ川・ヴァー(Váh)川沿いの低地および東南部のハンガリーへ続く低地を除くと，国土の多くは山地である。人口は538.2万(2004年)で，日本では北海道に近い規模になる。最大の都市は首都ブラチスラバ42.5万人(2004年)で，国土の南西端に位置し国境の街でもある。スロバキアの地域構成に関して，基礎となるのは3階層の行政区分，すなわち8地方(region)・79県(district)・2,920市町村(municipality)であり，統計の地域単位もこれにほぼ準拠している(クセンドヴァー2008)。これら地域概要に関する資料は，人口アトラスでは序章中の「スロバキアの概要(Slovakia in short)」に一括掲載されている。

III 人口の増減と分布—人口地理の基礎—

図1は，人口増減の国内分布を上記の3階層行政区分ごとに示したものである。いずれの地

域単位の分布図も，人口増減を絶対数と相対数(率)の2種の凡例で表示している。地方(region)単位の分布図から，1961—2001年の40年間で，どの地方も大なり小なり人口は増加したが，首都ブラチスラバ(BRATISLAVA)を含む西端の地方と逆側の東端部の地方でとくに急増，という大きな分布動向をとらえることができる。県(district)単位の分布図からは，中南部と東端部には人口が減少した県があること，またブラチスラバも中心部は人口減少であることがわかる。事象を観察する空間スケールを変えることによって，異なる地域の秩序が顕在化する。これは地理的な見方に関する重要な柱の一つである。

図2の二つの分布は，いずれも1990年代の人口増減に関するものであるが，地域単位の性質が異なっている。上の図は，行政上の県(district)単位で描画されており，近年のスロバキアにおける人口増減の東高西低パターンを読み取ることができる。また，首都ブラチスラバに注目すると，ブラチスラバ(BRATISLAVA)で人口減少するがその周辺の県では人口が増加している。他方，下の図は，都市機能地域(Functional Urban Region)を単位とする同事象の分布で，この地域単位は中心市および中心市と通勤によって一体化した周辺市町村から成っている。すなわち，これは日本の「都市圏」および「大都市圏」に相当するもので，機能地域の見方で設定された単位である。ブラチスラバに近接する市町村はブラチスラバ都市圏の一部となっていることがわかる。

図3は，スロバキアにおける人口ポテンシャルの分布を示したものである。人口ポテンシャルは計量地理学の分野で古くから使われてきた測度で，地域が有するポテンシャルを地域内の人口数だけでなく，地域外に存在する人口も距離に応じて算入する。同図によれば，都市人口数第1位のブラチスラバ(BRATISLAVA)および第2位のコシツェ(KOŠICE)にはポテンシャル値の明瞭なピークがみられる。これらに加えて，ブラチスラバからヴァー川に沿ってジリナ(ŽILINA)まで北東方向に延びる高ポテンシャルの地帯を見いだすことができる。スロ

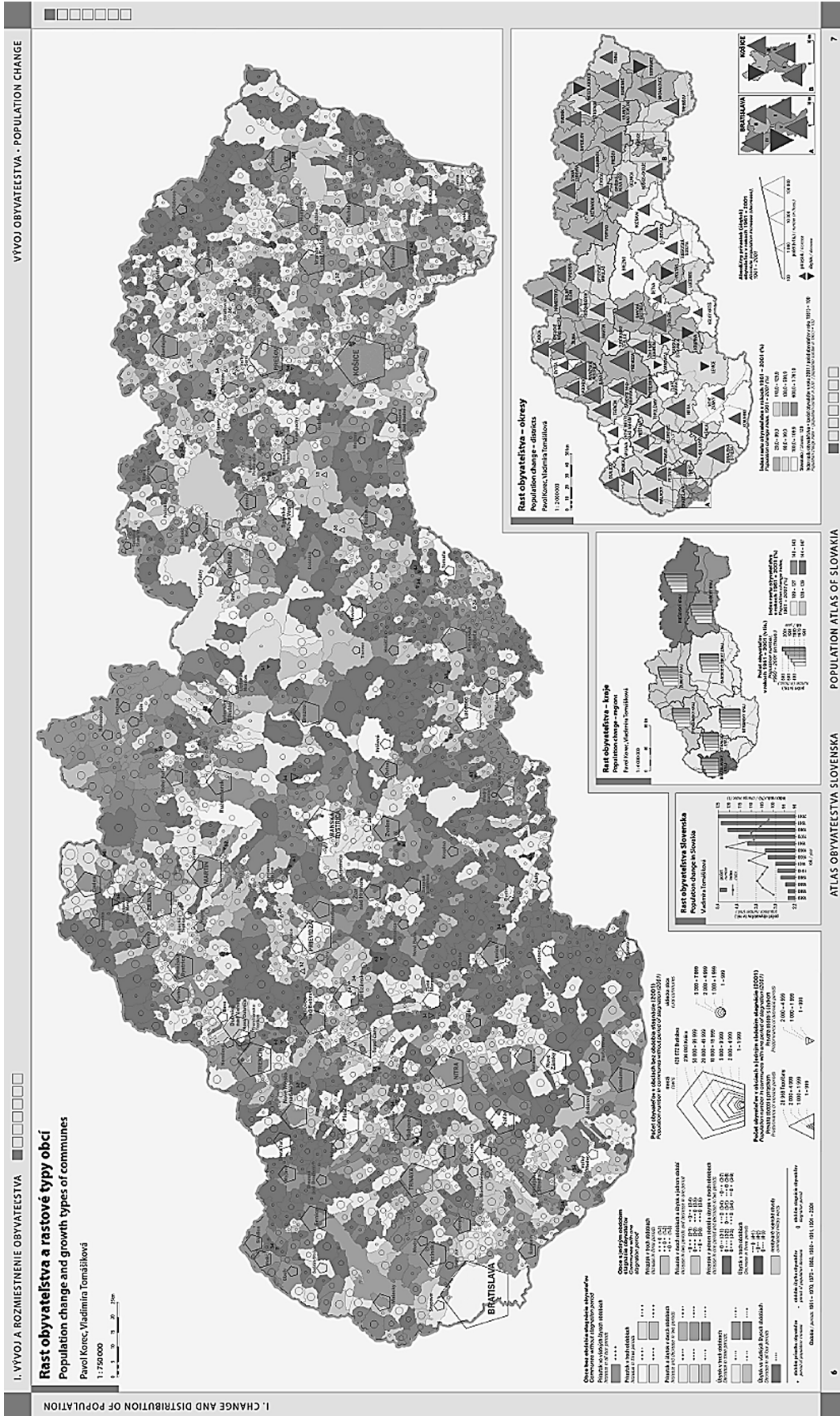


図1 スロバキアにおける人口増減の分布 (Mladek, J. et al. eds. 2006b による)

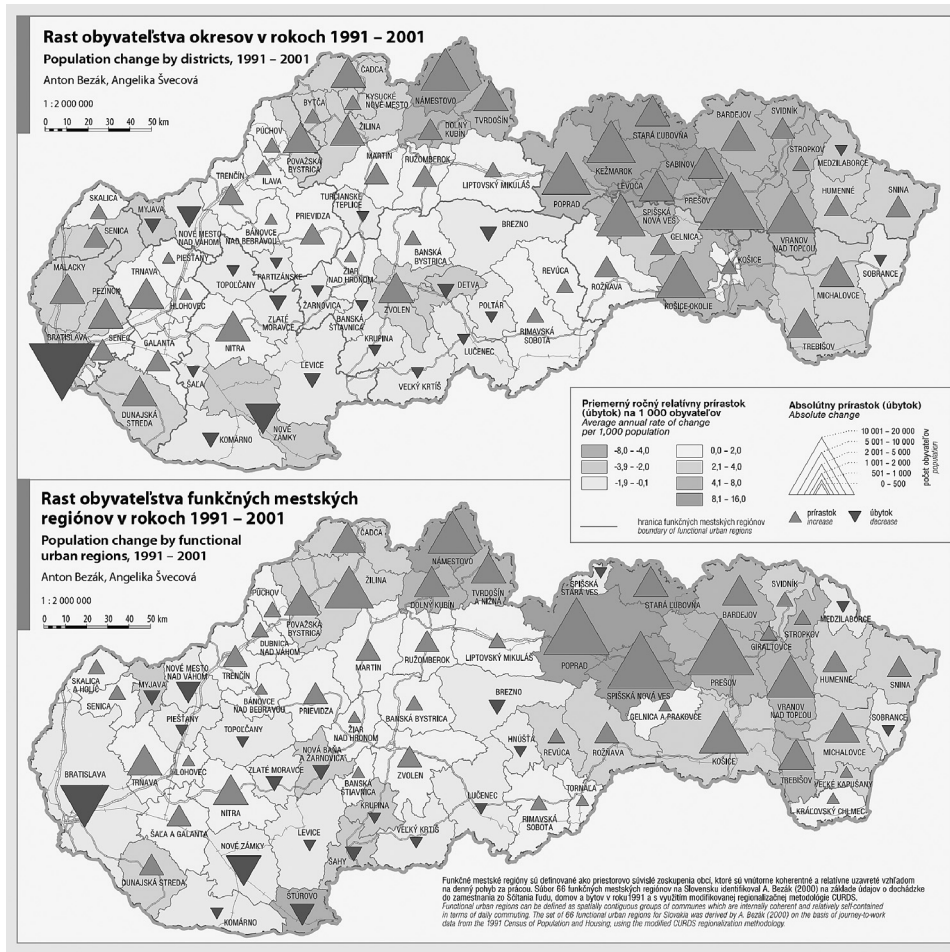


図2 形式地域（上）と機能地域（下）にもとづく人口増減の分布 (Mládek, J. et al. eds. 2006b による)

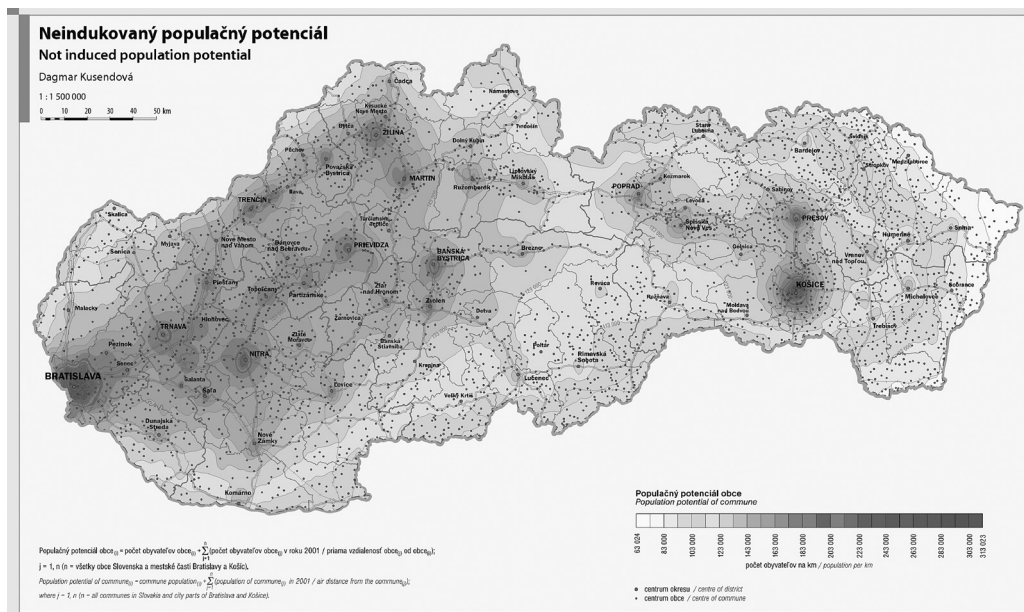


図3 スロバキアにおける人口ポテンシャルの分布 (Mládek, J. et al. eds. 2006b による)

バキアはチェコとの比較から、農業国として紹介されることが多いが、このヴァー川流域は社会主義の時代に工業化の進んだ地域で、比較的人口が稠密である。なお、人口分布に関しては、GISのバッファリングを援用した都市後背地の分布図も掲載されており、当該アトラスは地理学の新しい分析ツールの導入も積極的に行っている。

IV 人口の自然増減

—社会変動と民族の文脈—

「人口の自然増減」の章には、106の地図と62のグラフ・表が掲載されており、最も図版の多い分野となっている。図4に示す人工妊娠中絶数の推移によれば、スロバキアでは1988年まで中絶数は急増してきたが、その後は一転して減少し続けている。これは直接的には1986年の法改正によって妊娠12週までの中絶が事実上自由化されたことによるが、その背景には社会主義時代末期の社会通念の変化、自由な性行動、および確かな避妊法の欠如があるといわれている(Kobayashi et al. 2006)。

より長期的な社会変動として、スロバキアでは、日本と同様に少子高齢化が急速に進行している。合計特殊出生率は第二次世界大戦後は一貫して低下してきたのであり、21世紀に入って、スロバキアでは2002年に1.19まで、日本は2006年に1.26まで低下し、両国ともその後わずかに回復している。図5は、スロバキアにおける合計特殊出生率の地域差を、合計特殊出生率が1.8未満に低下した西暦年の分布で示したものである。これによれば、スロバキア西部では早い時期に少子化が進行し、国土の東半分での少子化は遅れる傾向にある。他にも、人口の自然増減に関する分布図からは、出生力、自然妊娠中絶、および新生児死亡について、スロバキア国土の東部で高く西部で低い、という地域差が明瞭にみられる。この要因として象徴的に言及されるのが、東部に多く居住するロマ（ジプシー）の人々の人口学的行動である。アトラスにも図示されているが、彼らの人口ピラミッドは他民族のそれと大きく異なって典型的な多産多死型を呈するのである（図6）。

ロマは、スロバキアではハンガリー人に次ぐ第2の民族マイノリティである。2001年のセンサスによればスロバキアのロマ人口は89,920で、総人口の1.7%にすぎない。しかし、実際の常住人口はこの3倍以上と見積もることもしできる(Mládek 2000)。

V 人口の空間的移動

国境を越える人口の移動に関して、スロバキアの人口アトラスと同時に出版されたモノグラフは、スロバキアの地域的な性格を次のように表現している。すなわち、「スロバキアは、よく知られた人口送出国と他のEU諸国との間で、緩衝国の役割を果たしている。(中略) 正規の手続きをしないでスロバキアに入国する人々は、西ヨーロッパを目指しているのであり、彼らにとってスロバキアは乗り継ぎの場にすぎない」(Mládek, J. et al. eds. 2006a: 74)。図7は、スロバキアを経由する上記の国際的人口移動を具体的に示している。移動による出入りを差し引いた純移動では、スロバキアはウクライナから流入超過であるが、同時にチェコやオーストリアに対しては流出超過となっている。

空間スケールを変えて都市とその周辺地域に注目してみると、より近年の大きな人口変動が見えてくる。図8は、縦軸に国内移動における市町村の純移動数（＝転入者数－転出者数）をとり、その値の推移を市町村の人口規模別に示したものである。これによれば、1995年を境に、青色および赤色で示す人口5,000未満の町村で純移動減少から増加へ、逆にその他の色、すなわち人口がそれ以上の市町では純移動増加から減少へ転換する傾向が明瞭である。首都であるブラチスラバと周辺市町村との純移動の関係が同様に転換したのもこの時期である。図9から、ブラチスラバの周辺市町村では、その多くがブラチスラバに対して1986～88年では純移動減（青系色）、2000～02年では純移動増（橙系色）という明瞭なコントラストが示されている。資本主義経済への転換期に国内の人口移動もまた首都への集中から分散・郊外化へと大きく舵を切っている。

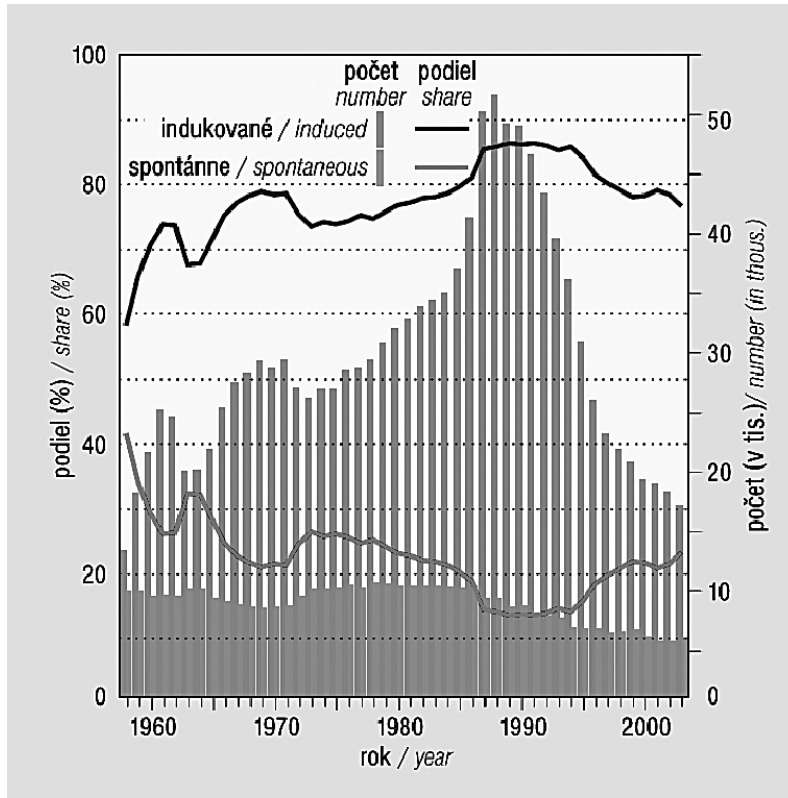


図4 妊娠中絶の実数 (number) および割合 (share) の変化

注：自然妊娠中絶数 (number of spontaneous abortions) = 流産・死産数
人工妊娠中絶数 (number of induced abortions)

(Mládek, J. et al. eds. 2006b による)

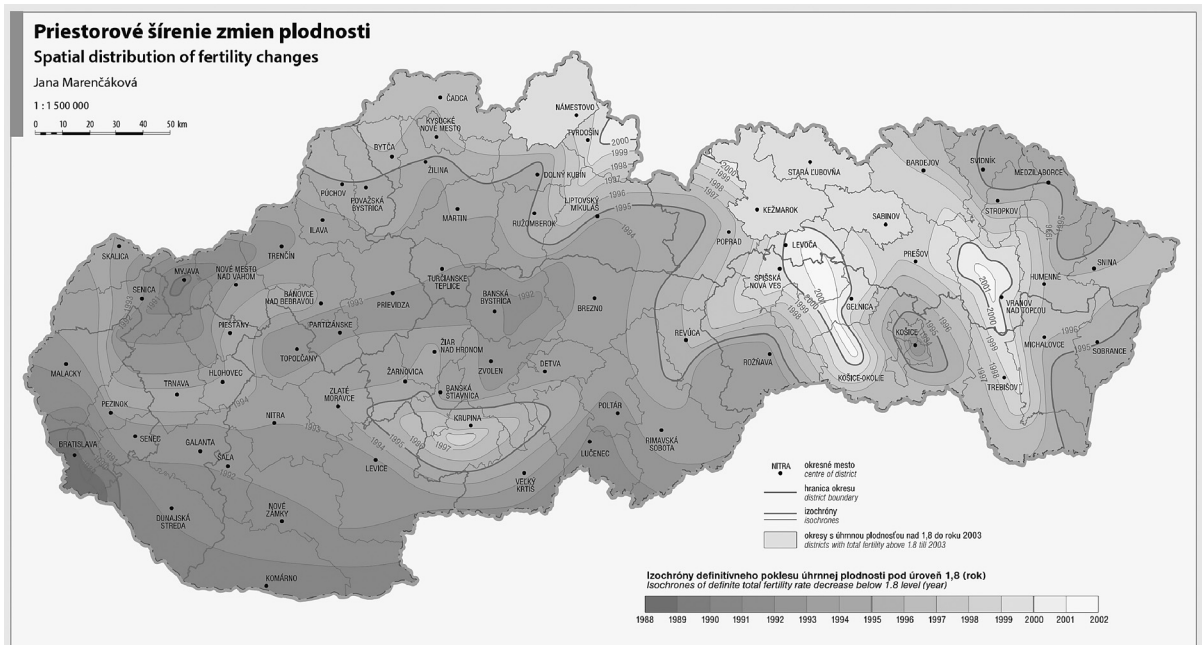


図5 合計特殊出生率が1.8未満に低下した西暦年の地域差

(Mládek, J. et al. eds. 2006b による)

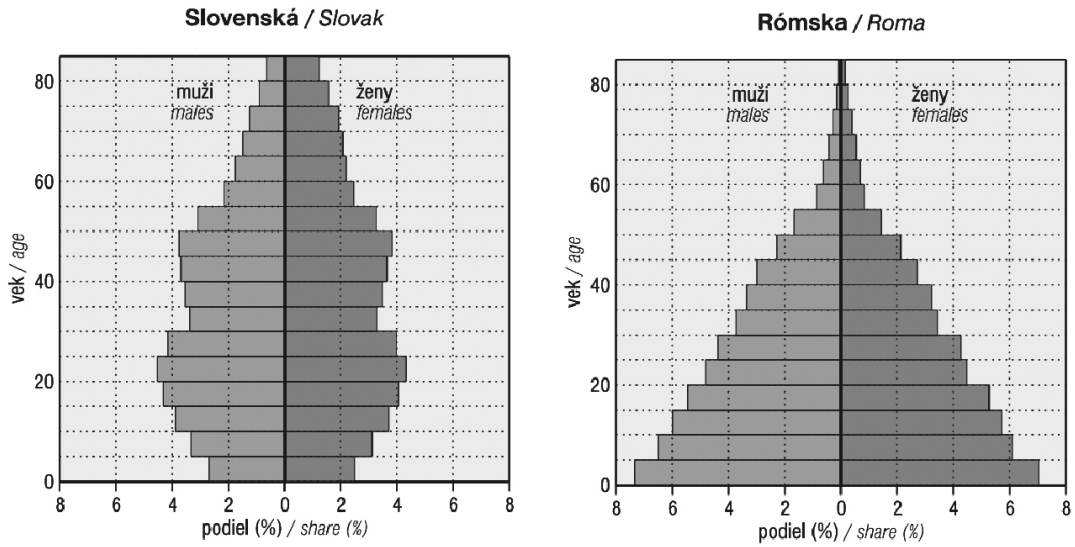


図6 スロバキア人（左）とロマ（右）の人口ピラミッド—2001年—
 (Mládek, J. et al. eds. 2006b による)

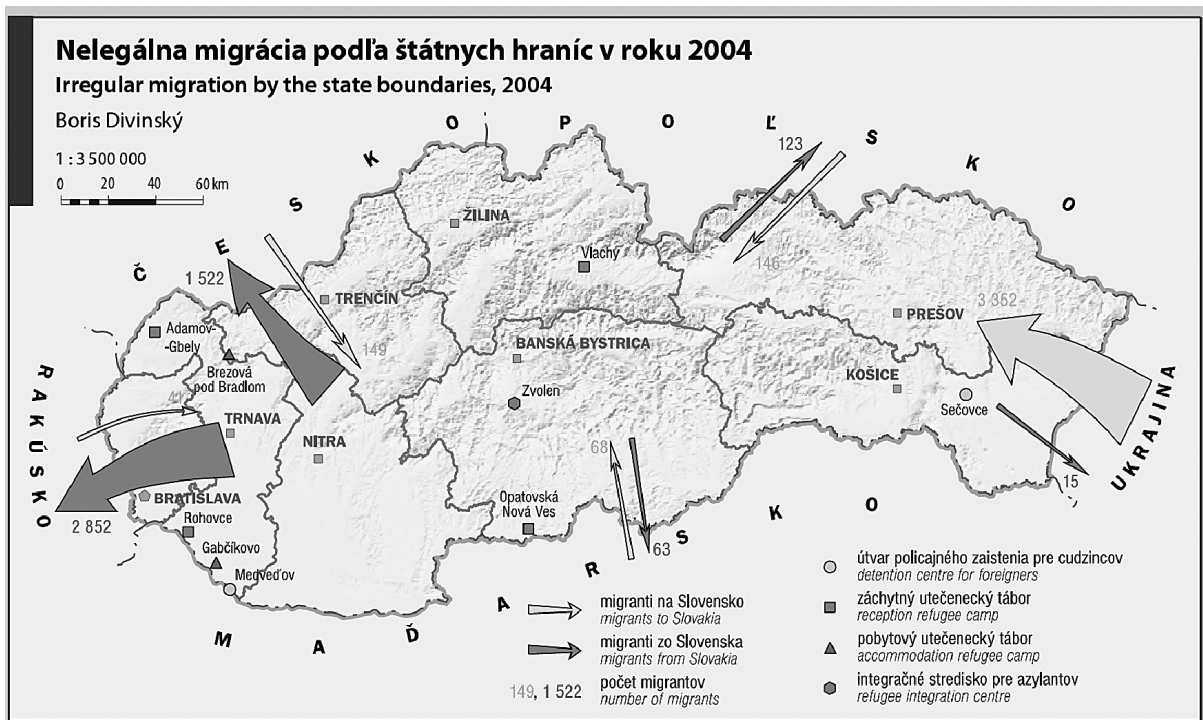


図7 スロバキア国境を通過する人口移動（正規の手続きを経ない移動）—2004年—
 注：ČESKO（チェコ），RAKÚSKO（オーストリア），UKRAJINA（ウクライナ）
 (Mládek, J. et al. eds. 2006b による)

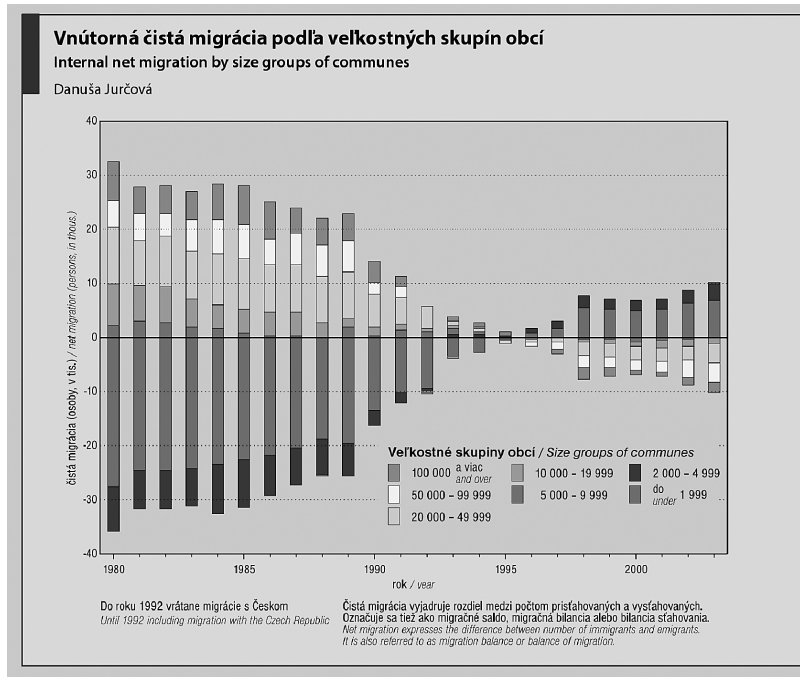


図8 スロバキアにおける国内人口移動の転換 (Mládek, J. et al. eds. 2006b による)

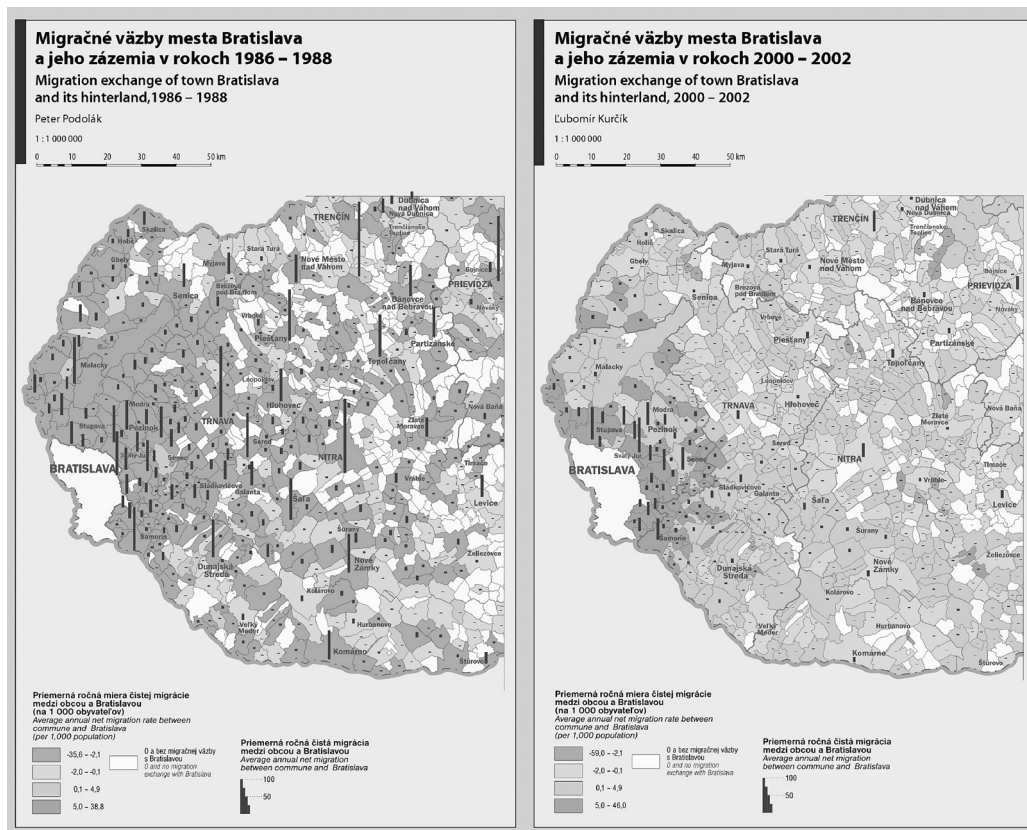


図9 ブラチスラバ (BRATISLAVA) と周辺市町村との人口移動の変化 - 1986・88年 (左) と2000・02年 (右) - (Mládek, J. et al. eds. 2006b による)

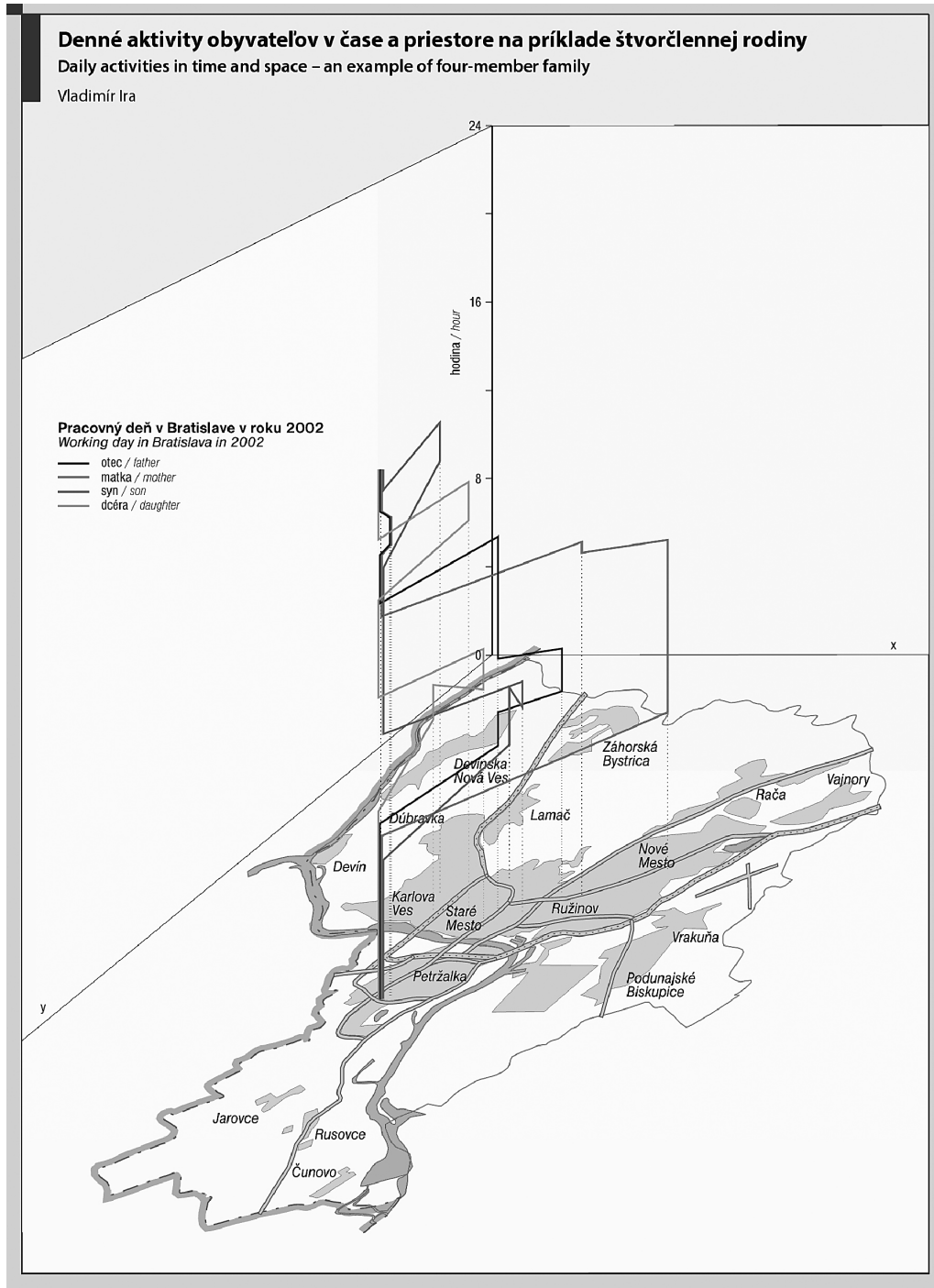


図10 1日スケールの時空間行動—4人家族の事例—
 注：図中の横書きアルファベットはブラチスラバ市内の区の名称
 (Mládek, J. et al. eds. 2006b による)

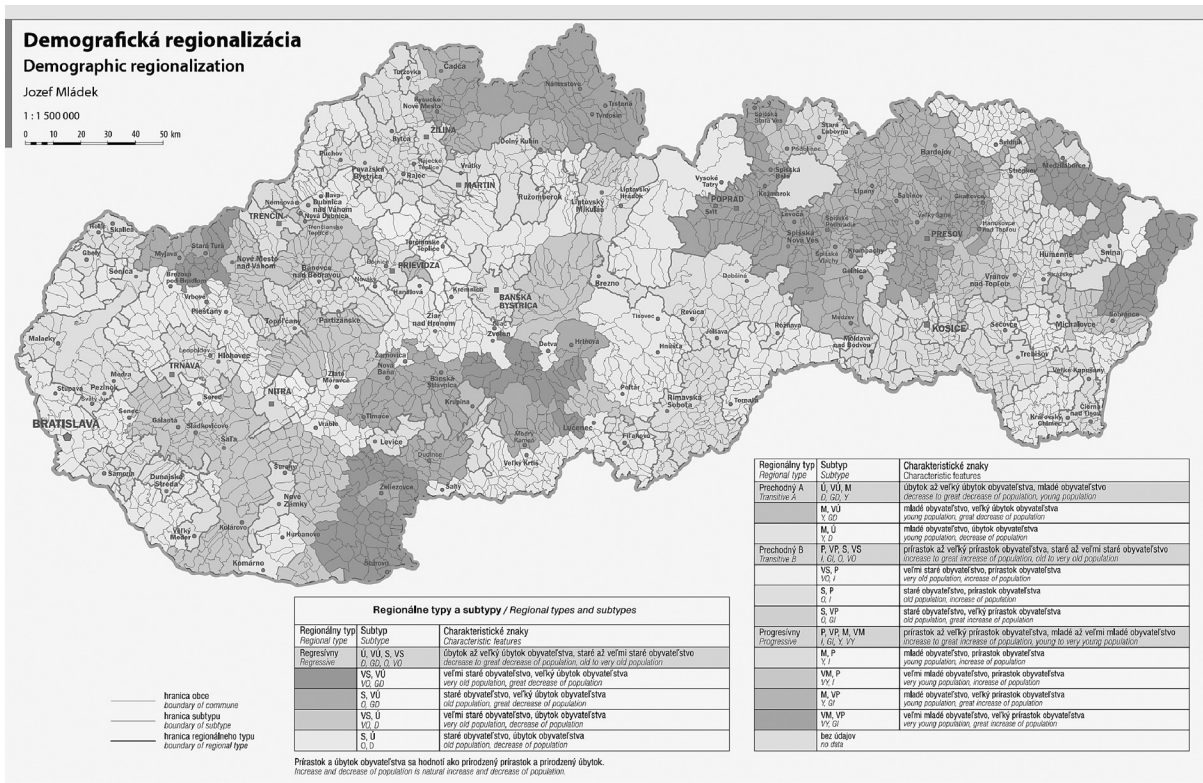


図11 デモグラフィック・リージョナリゼーション (Mládek, J. et al. eds. 2006b による)

VI 人口地理学の視点

他にもアトラスを特徴づける数多くの図版が掲載されている。さらに一部を紹介すると、通勤・通学移動の節では個人の行動を時空間パスとして表現した主題図が使われている。図10の4人家族は、ブラチスラバのベッドタウンであるペトログャルカ Petržalka に住んでおり、各人の行動の軌跡はブラチスラバの地域構造を反映している。すなわち、ドナウ川を挟んで対岸の旧市街スタレーメスト Staré Mesto が雇用や教育の集中する都心地域であること、ここから業務地域が北東のノベーメスト Nové Mesto まで延びていること、家族にとってこれら職場や学校が日中に長時間の滞在を要する場となっている。ペトログャルカのような画一的集合住宅群は、スロバキアの多くの都市に共通してみられる社会主義時代の遺産である。その後豊かになった一部の人々には都心周辺および郊外の高級戸建て住宅が、他の都市就業者には遠距離の通勤・通学を要するより外縁の住宅がそれぞれ供給されるようになった (Ohzeki 2006; 小林

2009)。ブラチスラバの地域構造は、図9の右図が示すように、市域を越えた都市圏レベルでの一体性を強めてきている。

地理学の見方や考え方を象徴するものとして、アトラス第6章「総合としての人口」にも注目したい。ここでは、それまで個別に扱われてきた人口事象が総合化され、地域特性をあらわす新たな指標に組み替えられている。たとえば、高齢者が多く人口が減少している青色の地域から、若さと人口増加を特徴とする赤色の地域うに、スロバキアは国土の東西で顕著な地域差を示すが、それはこの地域区分図からも読み取ることができる。第6章では、人口に関する総合的な指標であるとして、健康や生活の質 (quality of life) に関する多くの分布図も掲載されている。このような、人口を通して多面的・多角的に地域をみるという視点は、人口学よりもむしろ (人口) 地理学の特性であるといえよう。

VII おわりに—スロバキアの地域性—

スロバキアの人口アトラスは、人口事象を地

理的に考察することの重要性を雄弁に物語っている。アトラスには数多くの地域的な相関関係が示されており、そこから導かれる仮説としての因果関係をより確かなものとしていくことが今後の研究課題となる。

冒頭にも記したが、スロバキアはチェコと分離独立して、20年たらずの若い国である。隣接する周囲の国々は面積・人口・経済のいずれに

おいてもスロバキアより規模が大きい。そして、この国の社会変革は現在もなお進行中である。スロバキアの人口アトラスが母語であるスロバキア語と英語を同等に扱って出版されていること、人口地理学が政治的にも文化的にもこの国で重要な地位を占めていること、これらは国家としてのスロバキアの地域性と深く結びついている。

謝辞

本稿をまとめるに際して、ヨセフ・ムラーデク教授を始めとするコメニウス大学人文地理学・地理人口学研究室の諸先生方にはスロバキアにおける現地調査および資料収集においてご指導・ご支援を賜った。末筆ながら記して厚く御礼申し上げます。

なお、本稿は、2006年度岐阜大学在外研究員制度および日本学術振興会2003年度日欧科学協力事業「スロバキアと日本における出生率低下・人口移動・高齢化の相互関連に関する地理学的研究」(研究代表者:小林浩二)の成果の一部であり、日本地理学会2007年度春季学術大会(東洋大学)において概要を発表した。

文献

クセンドヴァー, D. 2008. スロヴァキアにおける人口分布の変化. 小林浩二・小林月子・大関泰宏編『激動するスロヴァキアと日本—家族・暮らし・人口—』17-27. 古今書院.

小林浩二 2009. スロヴァキアの首都, ブラティスラヴァの変化と特色. 岐阜大学教育学部研究報告 人文科学 58(2): 47-55.

Department of Human Geography and Demogeography, Faculty of Natural Sciences, Comenius University, Bratislava. *Staff*. <http://www.humannageografia.sk/eng/staff.php> (最終閲覧日: 2011年8月1日)

Kobayashi, K., Mládek, J., Širocková J., and Kobayashi T. 2006. Family behavior of Japanese and Slovak populations: similarities and differences. *Geographical Review of Japan* 79: 644-663.

Mládek, J. 2000. Roma demographic behaviour - a potential factor of social and ethnic conflicts, In *Peace perspectives for Southeast Europe*. ed. D. Šimko and H. Haumann, 77-83. Basel: Proceedings of the Symposium 2000.

Mládek, J., Kusendová, D., Marencáková, J., Podolák, P., and Vano, B. 2006a. *Demographical Analysis of Slovakia*. Bratislava: Comenius University, 2006.

Mládek, J., Vano, B., Kusendová, D., Marencáková, J., and Podolák, P. 2006b. *Population Atlas of Slovakia*. Bratislava: Comenius University, 2006.

Statistical Office of the Slovak Republic. *Population and Housing Census 2001*. <http://portal.statistics.sk/showdoc.do?docid=3035> (最終閲覧日: 2011年8月1日)

Yasuhiro, O. 2006. Urban settings for demographic consideration in the border capital of Bratislava. *Acta Facultatis Rerum Naturalium Universitatis Comenianae Geographica* 46: 129-140.

